

第13号 トリセツ

— 鳥大説明書 —

鳥取大学に関する様々な情報を取り扱い、解説していく情報紙です。学生スタッフが企画・取材をすることで、学生目線から見た鳥大の姿をお届けしたいと思います。

鳥大生の夏休み ~鳥大生の夏を追う~

2017年の夏休み、鳥取大学の学生はどのように過ごしたのでしょうか。夏休みは8月の初めから9月末までの約2か月間です。高校生の時より長い夏休みをどのように過ごしているか、今回、学生の皆さんに今年の夏休みの過ごし方について、アンケートと取材を行いました。

Q & A

実際に鳥大生に取材を行いました。今回取材に協力してくださったのは農学部生物資源環境学科国際乾燥地科学コース3年の針谷太さんです。



Q.今年の夏休みで印象に残ったことを教えてください。

A. 後期から所属する安延先生の研究室の海外調査に同行したことです。

Q.海外調査に同行した目的を教えてください。

A. 今後自分が海外で調査する際の参考にするためです。

Q.海外渡航で驚いたことはありますか。

A. タイ、ラオス、カンボジアの食文化の違いですね。タイは米を主食としていますが、ラオスやカンボジアでは旧宗主国(フランス)の影響でパンがよく食べられていました。パンを扱う店も多かったです。

Q.今年の夏休みはどのようにでしたか。

A. 実際に調査に同行することで現地の文化についての理解が深まり、今後私が研究を行う際の参考になりました。今までにないほど充実しており有意義な夏休みでした。

【針谷さんのスケジュール】

- 8月10日 夏休みスタート
- 8月中旬 集中講義
- 帰省
- 8月下旬 海外調査に同行(ラオス・タイ・カンボジア)
- 9月中旬 帰国
- 9月下旬 集中講義
- 10月2日 後期・授業スタート

2017年夏休みの過ごし方を教えてください。

鳥大生のランキング (64人の回答者/複数回答可)

- 1位(46) サークル活動
- 2位(33) 旅行
- 3位(30) アルバイト
- 4位(22) 資格試験の勉強
- 5位(13) 集中講義

()内は人数

※集中講義は週末や夏休み・冬休み等を使って、短期間内に集中的に行われる講義です。

では、**鳥大生の理想とする夏休み**はどのようなものなのでしょうか。アンケートでは次のような回答が見られました。

- 旅行のできる夏休み
- 大切な人との時間をもてる夏休み
- 暇のない夏休み

長期休暇だからこそ、旅行にでかけたり、帰省して家族や旧友との時間を大切に過ごしたりしたいという人が多かったです。また、しっかりと計画を立て、予定でいっぱい夏休みにしたいという人も数多く見られました。

多くの学生はそれぞれに目的を定め、計画的な夏休みを過ごしているようです。個人的には、今年の夏休みは短期留学、インターンシップと初めての経験ばかりで、充実した夏休みを過ごせました。(担当 上野)

中国地方最高峰の大山に行ってきました。牧場で食べたソフトクリームはとても美味しかったです。

帰省した時に撮影しました。車窓から見た太平洋の写真です。太平洋を久しぶりにみると、想像以上にきれいで驚きました!

わたしのトリくみ

お城まつり実行委員編

鳥大の学生や先生方、研究室の取り組みを紹介していくコーナーです。今回は、9月23日・24日に開催された第18回「鳥取三十二万石お城まつり」の実行委員にイベント部として参加したお二人にお話を伺いました。

鳥取三十二万石お城まつりは鳥取城再建を目的として開かれている祭りで、会場ではお城復元基金の募金も実施されました。

実行委員として鳥取大学の学生31人が参加し、「広報」「イベント」「屋台」の大きく3つの部署に分かれて準備や企画をし、祭りに参加しました。

5月末より実行委員会が開かれ、鳥取市役所の方や関係者、学生の間での企画の確認、意見の交換や準備を行いました。

質問項目

- 1なぜ委員に応募しましたか?
- 2イベント部会ではどんなことをしましたか?また、そこで感じたことや新鮮だったことがあれば教えてください。
- 3事前準備や当日の仕事などで実際にどんなことをしましたか?またその感想などを教えてください。
- 4祭りに参加した感想をお願いします。

地域学部地域学科国際地域文化コース1年 おおくぼ あい 藍さん



1お城まつりの時代行列が地元宮崎県のイベントと似ていると感じ、興味をもったからです。

2時代行列のルートを決めたり、案を出したりしました。時代行列のルートは、過去に祭りが行われたときの地図を参考にしました。地図を見ただけでは分からないこともあり、予定していたパフォーマンスのルートを変更することもありました。実際に時代行列に参加してみると、車が通っている横を歩くには危ないと感じるところがあったので改善の余地があると思いました。

3鳥取駅前でティッシュ配りをしました。ティッシュ配りのコツは、目の合ったお客さんに渡しに行く事です。なかなか貰ってもらえない分、受け取ってくれた時はとても嬉しかったです。



4一日目は時代行列に参加したのですが、重い鎧を着て歩くのが大変でした。このような立派な鎧を着る機会はないと思うのでとてもいい経験ができました。二日目はぬりえ教室で日本海新聞に掲載されたまんが『名将「吉川経家」』の作者である岩田廉太郎先生から鳥取の民話などを教えていただき、とても楽しい時間を過ごせました。ぬりえの絵柄には、鳥取県の東部に伝わる桂蔵坊というキツネの伝説のものもありました。二日間とても楽しかったです。

工学部社会システム土木系学科1年 たなか てつや 哲也さん



1普段客として参加することが多い祭りの運営について興味があったからです。また、18年間鳥取県に住んでいてもまだまだ鳥取について知らないことが多いため、お城まつりを通じてより鳥取について知ることができたらと思い参加しました。

2部会では、主にどんな募集をするのか、また自分達でどのような企画をするかを考えました。今までイベントを企画することが無かったため、どうすればお客さんに喜んでいただけるか考えるのは難しく、貴重な経験となりました。本番はお客さんに喜んでいただけて嬉しかったです。

3事前準備では、自分たちの思うような結果が出ず、企画を考える難しさを感じました。同時に、そのことを通じて、改善することの大切さを痛感しました。一日目は甲冑を着て鳥取駅周辺を練り歩きました。二日目はステージ担当として主に出演者の誘導、企画したイベントの運営を行いました。「風船チャンバラ」という企画では、紙風船を着けた甲冑を着て子どもたちに紙風船を割られる役をしました。予定よりも早くこの企画が終わってしまい、尺を考慮することも大切だと感じました。

4普段は「楽しむ側」ですが、今回はスタッフということで「楽しませる側」を経験し、運営することの難しさや面白さを実感しました。特に印象に残ったことは、自分の予想を超えてお客さんが来てくれたことです。一日目の時代行列の時、出陣式での人の多さには驚きました。また、来ていただいたお客さんや実行委員以外にも、企画に協力して下さった企業や農家の方など、様々な人がお城まつりという一つのイベントを成功させるために関わっていることがわかりました。

鳥取三十二万石お城まつりに参加しての感想 学生広報スタッフも実行委員として参加していました!

私たちは、広報部会に所属し、そこではチラシやポスターなどの部数、配布場所について話し合いました。大学生実行委員の「ポケットティッシュを配る」という案が新たに採用されたので、私たちの声が祭りに反映されて嬉しかったです。また、広報部会に参加して仕事をするときには人脈が大切だということも学びました。

一日目の時代行列で実際に甲冑を着て重さや歩きにくさに驚きました。歩き方にも指定があり、普通に歩くことも困難でした。子どもたちが沿道から手を振ってくれたことはとても励みになりました。二日目には記録写真係としてお城まつりの様子を撮影しました。学生広報スタッフとして写真は多くの枚数を撮っておくと良いと学んだことを活かし、この日は1000枚以上の写真を撮りました。

実際に実行委員として関わってみて、一つのイベントをつくりあげるためには様々な役割をする人が必要だということがわかりました。普段は完成された祭りを楽しむだけですが、その裏で祭りを成功させるために計画を立ててコツコツ積み上げてきた人たちがいるのを知ることができ、とても良かったと思います。(担当 清藤)

大学の授業でお城まつりの紹介を聞き、実行委員に応募しました。当日までの話し合いや準備に加えて、当日は「ミルクの梨デザート」「福ふくら」「梨尽くしメロンパン」「ウサギの尻餅パイ」の4つの新商品を鳥取のお店が出し、その中で一番おいしいと思ったものに投票、1位を決める「スイーツの陣」という企画の販売を担当しました。

当日は50セットしか用意していなかったため、午前11時30分ごろには売り切れてしまい、企画としての見通しの甘さを感じました。また、売り切れたことに残党が去っていく来場者の方々の反応から、イベントを楽しんでもらうためにはこのような見込みも正確に出すことも大切だと実感しました。

また、当日の賑わいからお城まつりが鳥取の地になじんでいること、市民のイベントへの関心の高さなどがうかがえました。実際に運営に関わることで得たものが多くあり、参加して良かったと感じています。(担当 三好)

【感想】今回、お城まつりの実行委員会として参加したお二人のインタビューを通して、表には出ない多くの努力の上でイベントが成り立っているということを感じました。学生がこのようにイベントの裏側に携わることは、貴重な経験だと感じ、これからも続けてほしいと思いました(担当 白方)

取材にご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

●2017年11月発行 ●編集発行/鳥取大学広報企画室学生広報スタッフ
ge-kouhou@ml.adm.tottori-u.ac.jp (ご意見・ご感想はこちらまで)

「困」の「手づくりまつり」イベントの裏側に潜入!

「困」の手づくりまつり

6月25日(日)に第21回「困」の手づくりまつり」が鳥取市文化センターで開催されました。これは子どもたちに地域の伝統遊びやものづくりを体験してもらいイベントで、鳥取大学からは全学共通科目「こどもの生活」と有志の学生がボランティアスタッフとして参加していました。街に住む職人や大学生など約200人が講師となりイベントに参加した子どもたちは、小型扇風機や万華鏡などといった手づくりのおもちゃを製作しました。学生広報スタッフもこのイベントに参加し、取材してきました!



地域学部地域教育学科4年
ひらみ なぎ
平見 颯さん

実行委員長にインタビューしました!

Q. 実行委員会に入ったきっかけは何ですか?

A. 私はものづくり教育の研究室に所属していて、その関係でやってみたいかと3年生の時に誘われたことがきっかけです。鳥取大学、鳥取短期大学、公立鳥取環境大学と鳥取にある3大学が関わるイベントは滅多にないので、絶対にやりがいがあると思い参加しました。

Q. 実行委員長をやってみてどうでしたか?

A. 去年の実行委員は、私以外の全員が進路や就活の関係で続けられなくなり、委員の人数が減ったため、昨年は各委員に役割分担ができていたことを、今年は私1人ですることになったのが一番大変でした。例えば、イベント関係者は200人くらいでしたが、私1人でその内の100人以上と連絡をとる必要があり、苦労しました。でも、仕事を協力してくれる人がいたときはとても嬉しかったです。

Q. イベントに向けてどんな準備をしましたか?

A. 講義を受講していた学生は、「イベントでどんなものづくりをするか」というところから関わります。まず授業内で学生全員が

一人一個作りたいものをプレゼンし、投票を行って8個に絞ります。その後グループ毎に分かれ、試作を重ねていきましました。例えばパルンカーでは、車がよく走るよう、ストローの太さや長さ、風船の大きさを考えたりしました。はんだごてを使用する小型扇風機では、安全面に気を付けた上で、クオリティを上げることが中心に試作を重ねていきました。

また、講義を受講していないボランティアの学生は、講師や職人が事前に考えた各ブースに分かれる形で担当を決めました。そのあと学生は講師と一緒に試作をして「てびき書」を書き、また試作を繰り返して、最終的に6月の第二回全体会に各ブースの紹介をしてもらいました。

Q. イベントに携わって得られたことは何ですか?

A. 様々な人と関わったことです。例えば、下準備の時に学生と講師が一緒に作業をするブースがあったのですが、私もそこに混じることもありましました。また、私は学生をまとめる係だったので、先生と同じ目線で話し合いをしたり、高校の先生などにメールを送ったりするなど、普段しないことが経験できたので自分のためになったなと思います。

Q. イベントを終えて

A. このまつりの開催は今年で最後と聞いています。イベントの解散式で、主催者として21年間先頭に立ち、走ってきた地域学部の土井康作先生にサプライズを行いました。実行委員の学生が花束と手作りのおもちゃを先生に渡し、とても喜んでいらした姿が印象的でした。今年で最後の開催というのを悲しむ声があり、似たようなイベントをやりたいという声も出ているようなので、学生の活動として、また別の形としても実現できたら嬉しいですね。私はもう4年生なので実際に関わることには難しいですが、このような取り組みが今後も続いてほしいという気持ちがあります。

Q. 当日の様子はどのようにでしたか?

A. 今年は会場の規模縮小に伴いブースの受け入れ人数も減ったのですが、来場者数は予想をはるかに超えており、午前中に材料がなくなるブースがあったり、イベント終盤では残ったブースに行列ができてきたりと活気がありました。手づくり体験を何度もしてくれる子どもがいて、楽しんでくれてるのが伝わってきて運営する側として楽しかったです。

Q. イベントを終えて

A. このまつりの開催は今年で最後と聞いています。イベントの解散式で、主催者として21年間先頭に立ち、走ってきた地域学部の土井康作先生にサプライズを行いました。実行委員の学生が花束と手作りのおもちゃを先生に渡し、とても喜んでいらした姿が印象的でした。今年で最後の開催というのを悲しむ声があり、似たようなイベントをやりたいという声も出ているようなので、学生の活動として、また別の形としても実現できたら嬉しいですね。私はもう4年生なので実際に関わることには難しいですが、このような取り組みが今後も続いてほしいという気持ちがあります。



イベントで開かれていた37講座のうち、鳥大生が運営していたブースのいくつかインタビューしました

■皮のストラップのブース

20人以上の子どもたちが来てくれました。特に女の子が多かったです。イベント当日までの段取りがうまくいかず大変でした。



農学部1年 西本沙那さん
地域学部1年 川下美和さん、松島実希さん

■よく走る! 蒸気船のブース

特に男の子が多く来てくれて人気でした。走るはずの船が走らないというハプニングもあって大変でしたが、小さな子どもたちと接することができて楽しかったです。



地域学部1年 谷口沙永さん

■牛乳パック小劇場のブース

絵を描くことが好きな子どもたちがたくさん来てくれました。この作品は4コマ形式の絵をかくのですが、自分では思い浮かばないことを子どもたちはすぐに思いついて、子どもの発想力はすごいと思いました。



地域学部1年 榎垣早苗さん

■光るスノードーム

午後までのイベントでしたが、このブースはお客さんが多かったため、用意していた材料がなくなり、午前中で終わってしまうほど忙しかったです。



医学部1年 大川実佑さん

イベントに参加した子どもたちの感想

楽しかったし、面白かったです。「てびき書」をもらったので、家で作ってみたいと思います。

イベントに参加した保護者の感想

子どもと一緒に自分も作り方を教わることができ、勉強になりました。また、本格的に木材を加工するものもありましたが、スタッフが子どもの意思を尊重してできる限り自力でやらせてくれたので、子どもにとって貴重な体験になったと思います。

学生広報スタッフも手づくり体験をしてみました!

膨らんだ風船がしぼむ際に生まれる空気の利用した「バルーンカー」を作りました。車の胴体・タイヤ部分となる段ボールはあらかじめ決められた型が準備されていますが、車を組み立てるためのパーツづくりや車を組み立てるといった作業は体験者がします。中でも一番難しいと感じた作業は、竹串の先端をカッターで削り鉛筆のような形にするという作業でした。なかなか上手く出来ませんでした。ブースを担当しているスタッフが作業内容や作業のコツを丁寧に教えてくれたおかげで、順調にバルーンカーを作ることができました。

スタッフは基本的に1対1の形で体験者につくり方を教えてくれるので、慣れない作業でも安心感を持ってできます。また、アドバイスをしたりお手本を見せたりするもの、実際に作業をするのは体験者なので、ものづくりを終えた時の達成感もひとしおです。

ものづくり終了後、各ブースごとに完成品と一緒に「てびき書」をもらいました。「てびき書」には材料や体験中に教えてもらった作り方の手順が載っているほか、家にある材料で代用して作る方法も載っており、その場限りで終わらないような技術の伝え方がされていると感じました。



▲てびき書の一例



感想

大学の講義でも「困の手づくりまつり」について紹介されていました。楽しくものづくりを体験できる場を子どもたちに与えているこのイベントに、地域の人々の温かさを感じました。(担当 西本)

私はボランティアスタッフとして実際にこのイベントに参加してきました。当日まで準備などで大変でしたが、子どもたちと触れ合うことができてとても楽しかったです。貴重な体験になりました!(担当 松本)

イベントを取材してみて、スタッフが親身になって教えているのが印象的でした。実際に手づくり体験をしてみて、鉛筆をカッターで削れるようになりました!(担当 大森)

▲解散式集合写真 地域の方々や学生ボランティアとともに全員で!

